

Daniel Deronda と Benjamin Disraeli

松本三枝子

ユダヤ人でありながら、英国保守党の党首となり、宰相としてイギリス帝国を率いることになったベンジャミン・ディズレイリには、若いころに書いた *Young England Trilogy* と呼ばれる小説群がある。これは、*Coningsby; or The New Generation* (1844)、*Sybil; or The Two Nations* (1845)、*Tancred; or The New Crusade* (1847) から構成される3部作である。本発表で注目したいのは、これらの小説に登場する、著者自身の理想を投影したと思われる Sidonia というユダヤ人である。彼は、スペイン北部のアラゴン出身のスペイン系ユダヤ人とされており、英国のみならず、ヨーロッパ中で、その財力と権力を行使するスーパーヒーローとして描かれている。その彼が、ユダヤ民族の優越性について、“An unmixed race of a first-rate organisation are the aristocracy of Nature” (*Coningsby* 193) と表現している。つまり、ユダヤ民族の純血主義と貴族主義を絡めて、裕福なユダヤ人資本家、シドーニアの優越性の根拠としているのである。George Eliot はこれに対して、1848年の書簡の中で、“I confess the types of the ‘pure races,’ however handsome, always impress me disagreeably—there is an undefined feeling that I am looking not at *man* but a specimen of an order under Cuvier’s class, Bimana” (*George Eliot Letters* I:246) と嫌悪を交えて批判している。さらに、このようなシドーニア像を、Patrick Brantlinger は、人種差別に人種差別で対抗したものとして、“Disraeli/Sidonia’s assertion of the superiority of ‘Hebrew intellect’ is partly an egoistic defence against antisemitism, in which he is incongruously trying to fight racism with racism—or, in other words, practicing a sort of revenge discrimination” (Brantlinger 264) と批評している。エマニュエル・トッドは『移民の運命—同化か隔離か』で、ディズレイリは10代で改宗しユダヤの慣習・宗教を知らず、貴族的理想に賛同して、ユダヤ民族の優越性と自己礼賛をしていると述べている。

確かに、現代の読者が読めば、自己中心的で説得力に欠けるシドーニア像であるのだが、19世紀後期にエリオットが、*Daniel Deronda* (1876) を執筆していた時には、ある種の存在感を持って、彼女のユダヤ社会の描写やユダヤ人登場人物の造形に、影響を与えていたのは間違いないだろう。例えば、次のような彼女の書簡は、彼女が新しいユダヤ人像を創造しようとして、すでに読者の中に定着していたシドーニア像と闘っていたことを語るものである。“Doubtless the wider public of novel-readers must feel more interest in Sidonia than in Mordecai. But then, I was not born to paint Sidonia.” (*George Eliot Letters* VI:222-23)。これは1876年に出版社の John Blackwood 宛てに書かれた書簡で、前述した1848年の書簡と合わせて読めば、ディズレイリのユダヤ民族礼賛の象徴となっているシドーニア像と決別する意思が明確に読み取れる。加えて、エリオットがこの小説を執筆していた1870年代後半には、ディズレイリが保守党党首であり、首相であった。彼が若い時代に書いた小説に登場するシドーニアは、ディズレイリと重複して読者に定着していたのである。それに対して、新しいユダヤ人像を造形し、ユダヤ主義の理解を深めることで、同時代の英国社会の人種偏見や、自己中心性を批判しようとしたのが、『ダニエル・デロンダ』であった。

この小説の主人公であるダニエル・デロンダは、ユダヤ人であることを不利と考えた母親により、その出自を隠蔽され、イギリス人紳士として育てられる。しかしながら、死期が迫った母に突然呼び出されユダヤ人であることを告げられる。自らの出自を回復したデロンダは、ユダヤ娘と結婚し、ユダヤ人の友人である Mordecai のユダヤ主義を受け入れ、ユダヤ民族の国家建設のために東方に向かう。このような経緯を持つデロンダが、ユダヤ主義を理解していく過程で重要な役割を果たすのが、モーディカイとの交流である。デロンダは彼を通して、英国におけるユダヤ人達の生活と思想を理解することになる。パブでのユダヤ人の会合に出席したデロンダは、彼らの英国社会への同化や、キリスト教への改宗についての議論を知ることになる。例えば、同化を支持する次のような意見が語られる、“... I am for getting rid of all our superstitions and exclusiveness. There’s no reason now why we shouldn’t melt gradually into the populations we live among. That’s the order of the day in point of progress. I would as soon my children married Christians as Jews. And I’m for the old maxim, ‘A man’s country is where he’s well off’” (*Daniel Deronda* 586)。それに対して、ユダヤ人のディアスポラの状況と意味を理解して、モーディカイが次のように応える、“Community was felt before it was called good I say that the effect of our separateness will not be completed and have its highest transformation unless our race takes on again the character of a nationality. That is the fulfilment of the religious trust that moulded them into a people, whose life has made half the inspiration of the world” (*Daniel Deronda* 594)。彼はユダヤ人の離散は、やがて国家として一つに再集合することで完結すると考えている。このようなユダヤ民族の国家建設を熱望するモーディカイのユダヤ思想に傾倒し、デロンダはその実現のために東方へと旅立つことになる。

このような二人の出会いの意味は象徴的な場面により提示されている、“As he[Deronda] lifted up his head while

fastening the topmost button, his eyes caught a well-remembered face looking towards him over the parapet of the bridge —brought out by the western light into startling distinctness and brilliancy—an illuminated type of bodily emaciation and spiritual eagerness” (*Daniel Deronda* 549). 肺病を病み死期の迫ったモーディカイは、デロンダに自らの思想の継承を託そうとしている。デロンダは、夕日に照らし出された友人モーディカイの姿を、テムズ川の子船から橋上に見つける。しかしながら、この場面では、まだデロンダの出自は明かされていないため、イギリス人紳士としては、モーディカイの願いを受け入れることはできない。つまり、橋での二人の遭遇は、二人の間での伝統の継承を予兆する象徴的な場面として、この物語で提示されていると理解できる。さらに、モーディカイは、カバラの教義に基づき、二人の関係を次のように、デロンダに語っている、“In the doctrine of the Cabbala, souls are born again and again in new bodies till they are perfected and purified, and a soul liberated from a worn-out body may join the fellow-soul that needs it, that they may be perfected together, and their earthly work accomplished”(*Daniel Deronda* 599)。事実、この後に、デロンダは自らがユダヤ人であることを知り、モーディカイのユダヤ思想への傾倒と使命は、彼の妹との結婚によりさらに強化され、ユダヤ人国家建設へと向かうことになる。

当時の英国は、東欧からのユダヤ人の移民が多く、人種の共存は、大きな問題となっていた。上記のユダヤ人たちの会合での同化の問題は、極めて現実的で普遍的な問題として読者は読んでいた。例えば、資産家の娘である Catherine Arrowpoint と 外国人ピアニストの Herr Klesmer の結婚は、身分違いの結婚として両親には反対されるが、実現している。また、イギリス人紳士として育てられたデロンダだが、自らの教育については、“Christian sympathies” (*Daniel Deronda* 724) として生涯消失することはないとしている。つまり、これらの小説内での事例は共に、人種的、文化的共存の可能性を示唆するように機能している。このように旧来から存在するユダヤ人問題だけではなく、広く人種問題をエリオットが認識するようになったのは、当時のイギリス帝国の存在が大きい。エリオットが作家として尊敬もしていた Harriet Beecher Stowe への次のような書簡がある。

As to the Jewish element in ‘Deronda,’ I expected from first to last in writing it, that it would create much stronger resistance and even repulsion than it has actually met with . . . Moreover, not only towards the Jews, but towards all oriental peoples with whom we English come in contact, a spirit of arrogance and contemptuous dictatorialness is observable which has become a national disgrace to us. . . The best that can be said of it is, that it is a sign of the intellectual narrowness—in plain English, the stupidity, which is still the average mark of our culture. (*George Eliot Letters* VI:301-302)

尊大さと相俟って当時の英国国民によるユダヤ人や東洋人に対する人種偏見を、知的狭量さ、さらには愚かさとして表現している。そして、エリオットは、そのような自国民への批判を内包しながら、作家として読者に迎合することなく、『ダニエル・デロンダ』を書いたことをストウに告白している。このように率直に、自国民を批判することができたのは、エリオットが前作の *Middlemarch* (1871-72) において、作家として頂点に達しており、自ら書きたいテーマを書くことができたことに加えて、反奴隷制作家であったストウとの関係も大きかった。エリオットは、ストウの小説における奴隷制の問題が、イギリス帝国内の他民族への人種偏見や人種差別の問題に通底していることを認識していた。このテーマは、*The Spanish Gypsy* (1868) でも扱われているが、英国国民の人種偏見を直接批判するという観点は、『ダニエル・デロンダ』まで、待たねばならない。

Matthew Arnold が、*Culture and Anarchy* において批判した同時代の英国社会の自己中心主義や功利主義は、『ダニエル・デロンダ』においても、完膚なきまでに批判されている。さらに、その対抗軸として提示されているのが、旧来から蔑視されてきたユダヤ民族とユダヤ主義である。デロンダが、イギリス人紳士としての自分を捨てて、ユダヤ人として生きていくことを選択するこの小説の結末は、英国社会や英国人であることの意味への根底的な疑問を呈することになっている。それは、ユダヤ人であるディズレイリが、シドニアで描いた夢のようなユダヤ人礼賛ではなく、むしろ、英国国民を通しての人種共存を訴求するものとなっている。

*本研究は、JSPS 科研費 16K02456 による研究成果の一部である。

References

Brantlinger, Patrick. ‘Nations and Novels; Disraeli, George Eliot, and Orientalism.’ *Victorian Studies* 35(1992):255-275. Print.

Disraeli, Benjamin. *Coningsby; or The New Generation*. 1844. Ed. Sheila M. Smith. Oxford UP, 1982. Print.

Eliot, George. *Daniel Deronda*. 1876. Ed. Barbara Hardy. London: Penguin, 1967. Print.

Haight, Gordon, ed. *The George Eliot Letters*. 9 vols. New Haven: Yale UP, 1954-78. Print.

トッド, エマニュエル. 『移民の運命—同化か隔離か』 石崎晴己, 東松秀雄 (訳) 藤原書店, 1999. Print.